

スペイン巡礼路

サンティアゴへ



はじめに

巡礼とは

キリスト教徒にとって、居住地の聖堂に礼拝に赴くことは、生活の一部でした。

一方、聖地を訪れることは、家を出た時から日常からの離脱を意味し、時空を超えて聖者と一体になれることであり、聖者と道程の艱難を共にすることだったのです。

聖地に到着してからは、聖者の聖遺物を目の当りにすることで、聖者の存在に共感し、聖者からの恩寵にあずかることに感謝するのです。

聖地に滞在した後、聖地で得た記念品共々もとの居住地に戻り、俗世界に復帰することが、巡礼なのです。

訪れる聖地が自身の居住地から身近な場所にあったとしても、それは巡礼だったのです。

巡礼を意味する英語の「Pilgrimage」はラテン語の「Peregrinus」から派生していますが、その原義は、居住している地域社会を出て、他の人々の居住地を通過して行くことです。

このように、キリスト教徒にとって聖地への巡礼とは、自宅から聖地を訪れて、また自宅に戻るといふ、直線的な行動でした。

キリスト教徒にとって、特別な三大聖地とは、キリストの処刑地であるエルサレムであり、聖十二使徒の聖ペテロや聖パオロ、聖ロレンツォなどの多くの聖人の殉教地であるローマであり、サンティアゴの埋葬地であるコンポステーラでした。

これらの聖地に巡礼に出かけることは多くの人にとって、生涯の夢だったのです。

目次

スペイン巡礼路

1. サンティアゴ聖堂

2. 巡礼路

フランス国内

スペイン国内

3. スペイン国内の巡礼路上の街

1. ブルゴス

(大聖堂)

2. カリオン・デ・ロス・コンデス

3. サアグン

(聖ティルソ聖堂、聖ロレンツォ聖堂、巡礼者修道院)

4. レオン

(大聖堂、聖イシドロ聖堂、聖マルコス聖堂)

5. アストルガ

(大聖堂、司教館)

補 フランスからの四本の巡礼路概略

スペイン国内の巡礼路

スペイン巡礼路

Los Caminos

1. サンティアゴ聖堂

スペインでサンティアゴと呼ばれる聖人は、聖書ではヤコブと記されています。ヤコブはガリラヤ湖で漁師として生計を立てていました。聖ペトロ、聖アンデレに次いで、弟の聖ヨハネ共々キリストに従った、聖十二使徒のひとりです。

エルサレムでヘロデ王により処刑されており、聖十二使徒の中で最初の殉教者でした。処刑された聖ヤコブの遺体は弟子たちにより船に載せられ、彷徨ったのちに、現在のコンポステーラの地に埋葬された、とされています。

その後長い間、聖ヤコブの聖遺骨のことは忘れられていましたが、アストリウス (Asturius) 王国のアルフォンソ (Alfonso) 2 世の時代、813 年になって、星の導きにより聖ヤコブの墓がサンティアゴの近郊で突然発見されました。たちまちその場所に小さな庵が建てられ、礼拝が始まったのが現在のサンティアゴ聖堂の元である、とされています。

10 世紀になるとヨーロッパの各地で、聖地巡礼の大きな波が起こります。

キリストの処刑地であるエルサレム。

キリストの聖十二使徒の筆頭者の聖ピエトロと聖パオロの殉教の地であるローマ。

コンポステーラも三大聖地のひとつとして多くの巡礼者を受け入れることとなります。聖ヤコブの礼拝堂に訪れるまでの巡礼路の整理も始まりました。

レオン・カステリア王国のアルフォンソ 6 世は聖ヤコブを祀る大規模な聖堂建設を企画し、コンポステーラに大司教座を設けて、聖地としての地位を確定させ、1075 年から聖堂建設を開始しました。これにより、巡礼者の数も増加していきます。

途中数度の中止期間を経て、1211 年 4 月 21 日に至り、現在の聖堂が完成しています。巡礼に出かける目的は、巡礼地に到着することで、その聖人と共に居るといった共感を得ること。またその聖人の聖遺物などを見、触れることで、身体の悩みを癒して頂くこと。それに贖宥を得ること。とされています。



2. 巡礼路

ひたすら歩き続ける。

コンポステーラのサンティアゴ聖堂に。

フランスからサンティアゴ聖堂に向かう巡礼路はフランス道と呼ばれますが、ヨーロッパの各地からサンティアゴ聖堂に向かう巡礼者はこのフランスからの道のいずれかをたどり、スペインに入ることになります。

□□□ フランス国内

フランスからサンティアゴへ向かう道は四本あります。

■ フランス北部からのスペインに向かう三本の巡礼路 (添付 A 参照)

1. フランスのパリを出発した巡礼者は、ひたすら南西に向かって歩み続け、トゥール (Tours) ===ポアティエ (Poitiers)===ボルドー (Bordeaux) を経て、ピレネー山脈に向かいます。

2. 東のヴェズレー (Vezelay) から出発した巡礼者もまた南西に向かい、ペリグー (Perigueux) を経由して、ピレネー山脈に向かいます。

3. 南に位置するル・ピュイ (Le Puy-en-Velay) を起点にした巡礼者は、西南西に向かい、コンク (Conges) ===モアサク (Moissac) を経由して、ピレネー山脈に向かいます。この三本の道は、フランスとスペインとの間に広がる、ピレネー山脈の手前の村、サンジャン・ピエ・ド・ポー (Saint-Jean-Pied-de-Port) で一本になり、イバニェータ峠 (Puerto de Ibaneta) を越えてスペインに入ります。

イバニェータ峠を越えてスペイン国内に入った後は、ロンセスバリャス (Roncesvalles) ===パンプローナ (Pamplona) を経由してプエンテ・ラ・レイナ (Puente La Reina) に至ります。

■ フランス南部からスペインに向かう巡礼路

南仏のアルル (Arles) を出発点とした巡礼者は西に向かい、トゥールーズ (Toulouse) を経由して、ピレネー山脈をソンプルト峠 (Col du Somport) で越えてスペインに入ります。

ソンプルト峠を越えた後はハカ (Jaca) ===サングエサ (Sanguesa) を経由してプエンテ・ラ・レイナに至ります。

このように、フランスからの二通りの道はプエンテ・ラ・レイナで一つにまとまります。

□□□ スペイン国内

スペインに入った後も、聖地に向けて、巡礼者は黙々と歩み続けることになります。

プエンテ・デ・レイナから、エステーリャ (Estella) === ログローニョ (Logrono) === サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダ (Santo Domingo de la Calzada) === ブルゴス (Burgos) === カストロヘリス (Castrojeriz) === フロミスタ (Fromista) === カリオン・デ・ロス・コンデス (Carrion de los Condes) === サアグン (Sahagun) === レオン (Leon) === アストルガ (Astorga) === ポンフェラーダ (Pomferrada) === ビジャフランカ・デル・ビエルソ (Villafranca del Bierzo) === ペドラフィータ・ド・セブレイロ (Pedrafita do Cebreiro) === ルーゴ (Lugo) === パラス・デ・レイ (Palas de Rei) と進み、遂にサンティアゴ・デ・コンポステーラ (Santiago de Compostela) に到着します。

この、コンポステーラのサンティアゴ聖堂に向かう、サンティアゴの道 (El Camino de Santiago) は単に「道」(El Camino) と呼ばれることもあります。

スペインに入ってからでも 800 キロメートルを超える距離があります。

これは東京駅から広島駅までの距離に相当します。

青森駅からだと東京駅を乗り越して熱海駅に到達します。

単に距離だけの問題ではなく、途中にはピレネー山脈ほどではないにしても峠や谷があり、高低差もかなりあります。スペインの「道」を踏破するにはひと月以上の日数が必要になると言われています。

この巡礼者に精神的、物理的な支援を施してきたのが、修道院でした。



■ スペイン各地からの道

フランスからの巡礼路の他に、スペイン国内の各地からサンティアゴへ向かう巡礼路が存在することは言うまでもありません。 (添付 B 参照)

例えば、マドリッド (Madrid) からセゴヴィア (Segovia) を経由してサアグンに入る巡礼路。

地中海に面したアリカンテ (Alicante) からトレド (Toledo) === アヴィラ (Avila) === サラマンカ (Salamanca) === サモラ (Zamora) を経由して、アストルガに入る

巡礼路。

同じく地中海の街、ヴァレンシア（Valencia）からソリア（Soria）を經由してブルゴスに入る巡礼路。

半島の南部で、ムスレムの中心都市であった、グラナダ（Granada） = = =コルドヴァ（Cordova） = = =セヴィラ（Sevilla）からサラマンカを經由してアストルガに入る巡礼路もあります。

このように、直接コンポステーラに入る巡礼路以外はフランスからの巡礼路に合流していることが分かります。

3. スペイン国内の巡礼路上の街

□□□ ブルゴス （Burgos）

丘陵地帯に位置し、9世紀末にアストゥリウス(Asturias)王国の要塞が建設されたのを街設立の嚆矢とします。現在では市民の憩いの城公園（Castillo de Burgos）になっています。

11世紀にはカスティリア（Castilla）王国の支配下に入り、王国の首都となっています。

イベリア半島からアラブ勢力を追放し、キリスト教国を建設するという、レコンキスタの中心地となります。その戦闘で大活躍した英雄のエル・シド（El Cid：1099年没）は街の近郊の生まれで、この街で教育を受けたことから、市内にはエル・シドを讃える像が多く見られます。街はアルランソン(Arlanzon)川に沿って展開しています。川の北側が旧市街で、サンタマリア門（Arco de Santa Maria）を抜ぐって、旧市街に入ることとなります。

王国の保護もあり、街は巡礼路の中心の一つとして栄えました。



△サンタマリア門

市内に12か所ある門の中でも一番大きく、有名な門です。

1516年にスペイン王を兼ねることになった、神聖ローマ帝国皇帝カルロス5世により再建されています。市街に入場する川に向かう面には門の中央にカルロス5世の像が据えられ、エル・シドを含む英雄、王侯貴族の像が皇帝を囲んでいます。この門を抜けると大聖堂前の広場に出ます。

なお、旧市街にはこの他に、東に聖ヒル門（Arco de San Gil）、北に聖フアン門（Arco de San Juan）、城の北側に聖エステバン門（Arco de San Esteban）、西端に聖マルタン（Arco de San Martin）などが残っています。



聖堂

◆大聖堂（Catedral de Santa Maria de Brugos）

1221年にそれまでにロマネスク様式の聖堂が存在していましたが、新たにゴシック様式で建設が始まっています。その後長く中断されていましたが、1567年になって完成しています。

正面に扉口が三か所並び、中央には薔薇窓、左右に六角形の尖頭を頂いた矩形の鐘楼が立つ大きな聖堂で、ケルン大聖堂を模倣したとされます。

聖堂の正面にはサンタマリア（Santa Maria）広場があり、聖母子の像のある噴水が置かれています。

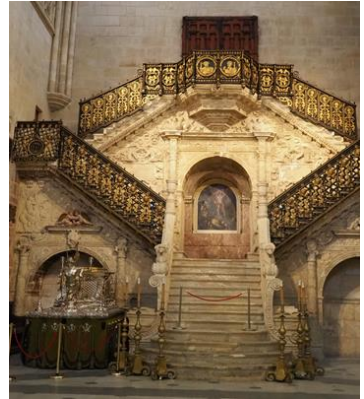
聖堂内は基本的には三廊式ですが、数度にわたり拡張されたことから、左右に大小の礼拝堂が並び、周回廊の脇にも回廊に沿って礼拝堂が並ぶという、巨大な構造になっています。





13世紀半ばに、袖廊の北側に、城のある丘側に面して造られた扉口（Puerta de la Coronera）があります。この扉口の両脇には聖十二使徒の立像彫刻が六人ずつ並び立っています。この扉口のある通路は狭く、通常は閉鎖されています。なお、聖堂内から見ると、この扉口に向かって「黄金の階段」が繋がっています。この階段を見ると、いかに北側の扉口が高い位置に造られているのかが分かります。

通常は、南側の扉口（Portico del Sarmental）から聖堂に入ることになります。



ます。

聖堂内はすべてが黄金で輝いています。

中央主祭壇の奥には「聖母被昇天」と「聖母戴冠」を中心に聖母伝が立体的に彫刻され、金箔が施された大きな、三面衝立が置かれています。

その前にある、内陣の聖歌隊席には彫刻の施された席が左右二段並んでいます。聖アンナ（Santa Ana）礼拝堂では、エッサイの樹の上にヨアキムとアンナが彫られ、その上層に聖母子の載る金色に輝く立体祭壇衝立が置かれています。その他多くの輝く祭壇が並んでいます、その中に、サアグンの聖フ



アン（San Juan de Sahagun）礼拝堂もあります。

なお、聖遺物容器を展示した博物館が併設されています。



△修道院

街の西方 2 キロほど離れたウエルガス修道院 (Monasterio de las Huelgas)、と東方に 4 キロメートルほど離れて、カルトゥーハ・デ・ミラフローレス修道院 (Cartuja de Miraflores) の二か所の修道院があります。どちらも歴史ある修道院ですが、共に開門時間に制限があるので訪問するには注意が必要です。

□□□ カリオン・デ・ロス・コンデス (Carrion de los Condes)

ブルゴスの西 70 キロメートルほどにある小さな村で、人口は 2000 人ほどです。

村に入ると最初に、聖クララ修道院 (Real Monasterio Santa Clara) が迎えてくれます。1231 年に建設された女子修道院で、13 世紀以降ムデハル様式で改修されています。その先には、巡礼路の聖母聖堂 (Iglesia de Santa Maria del Camino) があります。12 世紀半ばに建設されたロマネスク様式の聖堂で、南側面には後に造設された柱廊があり、柱廊の奥の聖堂の側面にある扉口は浮彫彫刻で装飾されています。聖堂内は三廊式の立派な聖堂で、主祭壇には一面衝立祭壇が置かれています。更に進むと村の中心の村役場の前には、サンティアゴ聖堂 (Iglesia de Santiago) があり、1160 年頃に建設された小さなロマネスク様式の聖堂で、扉口には浮彫彫刻が施されています。

西に向かい村の端まで進み川を渡ると、11 世紀にこの地を支配していた豪族がコルドヴァから聖ソイロの聖遺骨を移遷したソイロ修道院 (Monasterio De San Zoilo) があります。1076 年にはクリュニー会の傘下に入り、レオン・カステリア王家の庇護を受けて勢力を増し、1118 年にはフロミスタ (Fromista) の聖マルタン聖堂を傘下の小修道院とするまでになっています。

このほかにも、聖十字架聖堂 (Cafradia de la Santa Vera Cruz)、聖フリアン聖堂 (Iglesia de San Julian)、聖使徒アンドレス聖堂 (Iglesia de San Andres Apostol) など、小さな村にはふさわしくないほどの数の聖堂と、大きな修道院がその歴史と共に存在しています。

過去に生きている村です。



□□□ サアグン (Sahagun)

スペイン国内の巡礼路のちょうど、中間地点にある村がサアグンです。カリオン・デ・ロス・コンデスから 40 キロメートルほど西です。

サアグンの西端にある、聖十字架ベネディクト会修道院 (Monasterio de Santa Cruz Benedictinas) の道を挟んで反対側に、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの中間地点であることを示す銅版が埋められた石碑があります。脇には杖と水筒代わりの瓢箪がぶら下がっているのはご愛敬でしょう。

フランスからスペインに入った巡礼者は、スペインでの巡礼路の、やっと半分まで来たことを知るのです。

サアグンは現在では 3000 人ほどの村ですが、その歴史は古く、ローマ帝政時代の初期から宿場として記録に残っています。村の名前がサアグンとなったいきさつは、聖ファクンドによります。



聖人名の San Facund (サンファクンド) が San Fagun となり、SaFagun から Sahagun になったとされます。

この聖ファクンドは聖プリミティブ (San Primitivo) とともに、ローマ帝政初期のキリスト教弾圧の時代に迫害された後に処刑され、その遺骸はセア川 (Cea) に放棄されました。弟子たちは二人の遺骸を集めて祠を立てて埋葬し、殉教者として祀ったとされています。祠は時代を経て拡大し、ベネディクト派の修道院となっています。8 世紀末にはシャルルマーニュも認める存在にまでなっている。

イベリア半島がイスラム勢力により蹂躪された時代には修道院は数度にわたり略奪や破壊をこうむっています。

レオン国王のアルフォンソ 6 世は兄弟との抗争に勝利して 1073 年に、レオン・カステリア王国の王となりましたが、宮廷はオヴィエド (Ovied)、サンティアゴ・コンポステーラ、レオン、ブルゴス、と各地を転々とし、定まることはありませんでした。1075 年になって、漸くサアグンに落ち着くことになります。

1077 年にグレゴリウス 7 世が教皇となるとスペイン国内にも叙任権問題が発生します。1078 年に発行された国王の公文書によると、サアグンのロベルト修道院長はフランスのクリュニー会と連携して修道院改革を推進することをうたっていますが、その裏でモサラベ典礼を継続させることで国王と妥協していました。

1079 年末に、国王は二度目の妃として、コンスタンツァ (Constanza de Borgona) をブルゴーニュから向かい入れ、フランスとの関係を強化させます。コンスタンツァの信仰

と関連のあったクリュニー派の聖職者をフランスから多数迎え入れ、教会改革に取り組むこととなります。

グレゴリウス7世教皇は国王の再婚に難色を示したため、リチャード枢機卿は国王の再婚の承認とサアグンの修道院長の更迭を教皇に捧呈しました。グレゴリウス7世教皇は1080年にヒュー修道院長とアルフォンソ6世に書簡を發し、アルフォンソ6世がヒュー修道院長の意向を受け入れない場合には教皇自らスペインに直接介入することを申し入れています。

1083年にはサアグンの修道院長ロベルトはローマに召喚され、今後サアグンの修道院を教皇の直轄とし、教皇自身が修道院長を任命すること、毎年奉納すること、を命じられました。

グレゴリウス7世教皇からの強い意向を受け入れ、アルフォンソ6世はローマ典礼を受け入れ、サアグンの修道院長の更迭を行っています。

サアグンの修道院長をロベルトからベルナルドに変更したことで、王の結婚問題は友好裡に進められました。王はイベリア半島の征服をもくろみ、ムスレム支配下でのキリスト教典礼（モサラベ典礼）をローマ典礼に変更することで、ローマ教皇と連携を図る、という政治的な思惑があったのです。

1085年にトレドをムスレムから奪還すると、サアグンの大修道院長となっていたベルナルドをトレドの大司教に送り込み、今度はローマ教皇と対抗することを図っています。その結果、スペインの教会組織はフランス人の司教に門戸を開き、クリュニー会に聖職を明け渡すこととなります。こうして教皇のレオン・カステラ王国への干渉は排除されることになりました。ベルナルド大司教はアルフォンソ6世の生涯の補佐官となっています。

サアグンは今や単なる修道院の在る宗教都市ではなく、アルフォンソ6世のお気に入りの宮殿のある場所となっています。



国王はサアグンを特別扱いにして、市（場）の開催に免税処置を行うとともに、移住する者を税法上で優遇しました。クリュニー会の修道院には法律上の特権も与えています。この処置が後のサアグンの大発展につながり、サアグンはスペインのクリュニーと言われるまでになるのです。

1109年にアルフォンソ6世は死去し、王の遺

体はサアグンに埋葬されました。

アルフォンソ 6 世を継いだウラカ(Urraca)女王の時代になっても引き続き、クリュニー会の勢力拡大は続き、多くの修道院や聖堂を傘下に収めることになります。

宗教面だけでなく、1347 年にはサアグンに大学が設置され、サラマンカ大学と競うまでになっています。

19 世紀になって、修道院、聖堂の大土地所有制の禁止により、クリュニー会とその修道院は急速に勢力を失い、それと共にサアグンそのものも没落していったのです。

村には桁外れの大きさの廃墟となった聖ベニト修道院 (Monasterio Real de San Benito) があります。高い鐘楼と崩れ落ちた扉口跡が往時をしのばせます。また、脇にはこの修道院の一部を構成していた、道いっぱいに広がる門 (Arco de San Benito) の跡があります。壁龕に納められた彫像も風化が進み人物名も分かりません。

現在では巡礼者も宿泊せずに通過する村になっています。往時の勢いは全くなく、観光客が訪れることもありません。

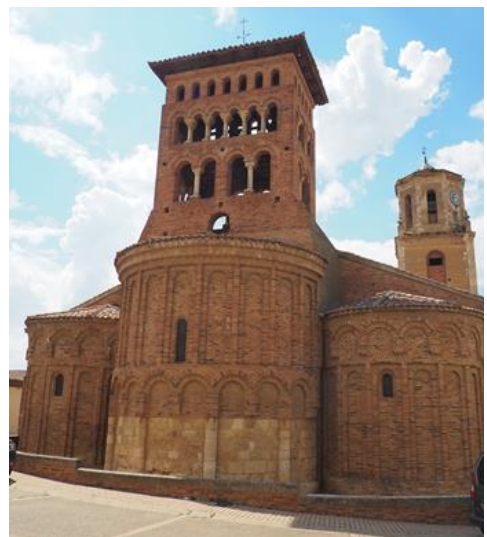


聖堂

◆聖ティルソ聖堂 (San Tirso)

11 世紀に建設された、ロマネスク様式とムデハル様式の混在する聖堂です。聖ティルソは 3 世紀半ばに小アジアで殉教した聖人です。

外陣を外側から見ると、中央に半円柱形の大きなアプシスがあり、両脇に小型のアプシスが並んでおり、ロマネスク様式の聖堂建築であることが分かります。身廊の内陣が位置する上に聳える大きな四層の鐘楼にはムデハル様式が認められます。



大きな窓が並ぶ大きな鐘楼が、全体として武骨な印象を与えています。聖堂の北側面には本来正面にあるべき、ナルテックスがあり、その中央より聖堂に入りますが、この柱廊は 19 世紀に追加されたものです。



聖堂内は三廊式で三箇所の祭壇が並んでいます。中央の主祭壇は一段高くなっており、アプシスにキリストの磔刑像があるのみの簡素な造りです。

内陣の位置するところまでが当初のロマネスク様式の部分で、この上にムデハル様式の鐘楼が聳え立ちます。長さの割に横幅が広く、身廊の後方の両脇には聖歌隊席が並び、聖堂の西側にも主祭壇に向き合う形で聖歌隊席が

設置されていますので、正面に扉口はありません。

なお、アプシスの奥にある一部の石には文字彫刻（Marcas de canteria）が見られます。簡単なアルファベットを刻み込んだもので、石工の記録と思われます。

このような石に刻まれた文字は他の聖堂でも気を付けてみると見つかります。

外観に聖ロレンツォ聖堂との類似点が見られます。

◆聖ロレンツォ聖堂（San Lorenzo）

11 世紀には存在していたロマネスク様式の聖堂を改築して、13 世紀に建設されています。

聖ティルソ聖堂同様に、ロマネスク様式とムデハル様式の混在建築ですが、聖ティルソ聖堂よりひととき大きな四層の鐘楼が聳え立っています。

イタリアでは多くの聖堂で見られる、聖堂の脇に独立して建つ鐘楼はありません。

聖堂の南面に沿って九つのアーチ型が連なる、ポルティコがあり、扉口は左から三番目にあります。西端にはヘスス礼拝堂（Cappella Jesusu）が隣接しています。





△ムデハル様式

1492年にグラナダ王国（Reino de Granada）が陥落し、イベリア半島からムスレム王国が追放されたことで、レコンキスタが完遂します。その後イベリア半島に残留したムスレムによる建築様式をムデハル様式と呼びます。煉瓦積みで、外壁に幾何学模様が施されるのを特徴としています。

◆巡礼者修道院（Santuario de la Virgen Peregrina）

13世紀にアルフォンソ10世により、フランチェスコ派の修道院として建設されています。ここもロマネスク様式とムデハル様式が混在した構造です。

女性の巡礼者の宿泊施設として活用されてきましたが、現在では博物館と展示場になっており、その役割も終わっています。



□□□ レオン（Leon）

街の歴史は古く、紀元前にローマの軍隊が置かれたことに始まります。その後西ゴート族の支配下に入り、文化経済共に発展しましたが、ムスレムの攻撃で711年に西ゴート王国は滅亡してしまいます。

その後西ゴート王国の貴族がアスト

ゥリアス王国を西ゴート王国の継承王国として建国させ、910年にガルシア1世（Garcia I）がレオンを首都としたことで、レオン王国と呼ばれるようになります。



1037年にフェルナンド1世（Fernando I）により、カステーリャ=レオン王国となります。カステーリャ王国とレオン王国の関係は非常に複雑で、1240年にレオン王国は滅亡し、カステーリャ王国となります。

街には王家の紋章としてのライオンが良く見られます。旧市街の北の城壁の上に小さな城跡があります。

街には大聖堂の他王家の墓所であった聖イシドロ聖堂やサンティアゴ騎士団の聖マルコ聖堂など由緒ある聖堂があります。街の中心地にはガウディの設計で有名なボティネス館（Casa Botines）があります。



△ボティネス館

アストルガ（Astorga）で司教館を建設したガウディ（Antoni Gaudí）を招聘し、1891年に建設した館です。ネオゴシック様式の4階建てで、両端に細い円柱形の尖頭が付いています。以前の所有者のボティネスの名前で呼ばれて

いますが、現在では金融会社が入っています。

中央の入口の上には聖ゲオルグの龍退治の彫刻が載っています。

なお、この建屋の前の広場には、ボティネス館に向かって椅子に座り、設計図を持ったガウディの銅像が置かれています。



聖堂

◆大聖堂 Catedral (Santa Maria)

ローマ時代の浴場の跡に建設された聖堂から始まり、11世紀にはロマネスク様式の聖堂が存在していましたが、1205年から14世紀初めまでの100年間をかけてゴシック建築の聖堂として建設されています。更に、改築を重ね、完成したのは1472年のことでした。

ブルゴス (Burgos) の大聖堂より後に建設されています。なお、フランスのランス大聖堂の構造様式を参考にしたとされています。

正面には三連式の扉口が並び、左の扉口のティンパナムには生誕、東方三王の礼拝、エジプト逃避、

が施され、中央の扉口には玉座のキリスト、右の扉口には聖母被昇天と、聖母戴冠の浮彫彫刻があります。また各扉口の周辺にはキリストの公生涯の他、多くの聖職者、王侯貴族、奉納者などの彫像が並んでいます。

中央には大きな薔薇窓があり、両脇には大きな鐘楼が聳え建っています。

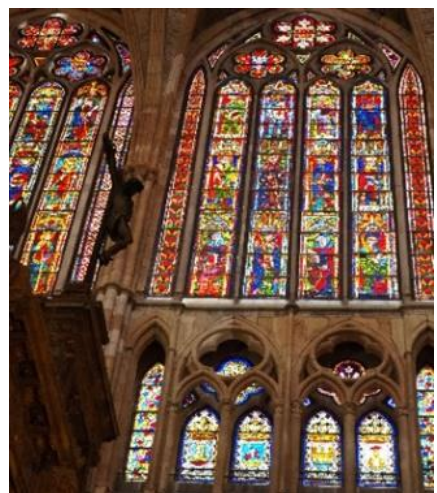
南側翼廊の扉口も同じような三連式で、中央の扉口には玉座のキリストの両脇に福音書記者の表象と机に向かう福音書記の浮彫彫刻が見られます。なお、この扉口は閉鎖されています。聖堂の北側には回廊が接続しています。

聖堂内は三廊式で見上げる高さのアプシスは天井までがステンドグラスで飾られています。また両側壁も見事な造りの背の高いステンドグラスで覆われており、四方から採光されています。



中央には巨大な聖歌隊席があり、中央主祭壇には聖母像を中央にした大型で浮彫彫刻が施され、金鍍金された祭壇衝立が輝いています。

中央には巨大な聖歌隊席があり、中央主祭壇には聖母像を中央にした大型で浮彫彫刻が施され、金鍍金された祭壇衝立が輝いています。



多くの礼拝堂にも極彩色の衝立が置かれ、色鮮やかな聖堂です。

なお大聖堂の左側に大聖堂博物館があり、聖堂の回廊部分を廻ることができます。特別展示室には係員の開錠を待つ必要があります。

中は撮影禁止です。



◆聖イシドロ聖堂 (Basilica de San Isidoro)

ローマの神殿跡にロマネスク様式で洗礼者聖ヨハネを奉獻して建設されていましたが、1063年にアルフォンソ5世 (Alfonso V) により、新たにセヴィラ (Sevilla) の聖イシドロに奉獻して建設されています。



聖イシドロは西ゴート王国時代の大学者で聖人です。20巻にも及ぶ百科事典のような「語源」の著者です。

歴代の王家の菩提寺で、多くの王侯貴族が埋葬されています。

聖堂の側面は城壁であることから旧市街の西端に位置していたことが分かります。

中央扉口の上には旧約聖書の生贄のイサクの他浮彫と上に天の子

羊の彫刻があり、一番上には馬に乗り、モスレムを成敗する聖イシドロの彫刻が載っています。

聖堂内は三廊式で、中央主祭壇には24枚のキリストの公生涯を描いた祭壇衝立があります。ロマネスク様式の柱頭飾りのある柱を多く見ることができます。



◆聖マルコス聖堂 (San Marcos)

11世紀半ばにサンティアゴ巡礼者の宿として街外れに建設されました。その後16世紀になって、ルネサンス様式で全面的に改築されています。

修道院 (Convent de San Marcos) の正面扉口はスペイン



特有のプラテレスク（Plateresque）で飾り立てられています。その後サンティアゴ騎士団の本拠地として使用されていましたが、現在では豪華なホテル（Parador）として利用されています。

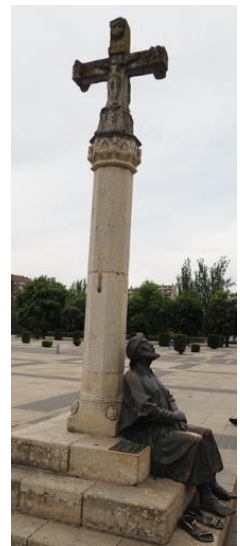
なお、建屋の右端に聖マルコス聖堂が接続しています。

扉口には多くの貝殻の彫刻がちりばめられて

います。聖堂内は単廊式で、両脇に礼拝堂が並んでいます。

聖堂前の広場には、十字架に背をもたれ、サンダルを脱いで一休み

する巡礼者の像が置かれています。今も昔も、変わらぬ風景とされます。



□□□ アストルガ (Astorga)

レオン（Leon）から50キロメートル程西に位置しています。紀元1年にローマの砦が建設され、アウグストゥス皇帝より、アストゥリカ・アウグスタ（Asturica-Augusta）という壮大な名称を受けるほど重要なローマ都市になっており、ローマの浴場跡もあります。

3世紀には、スペインの三か所に司教座が置かれたことが記録されています。アストルガ、メリダ（Merida）、サラゴサ（Zaragoza）で、アストルガは、歴史上重量な位置を占めていたことが分



かります。伝承では、サンティアゴと聖パウロがアストルガを訪れたとされています。

西ゴート王国を経て、ムスレムとの抗争時代にはキリスト教地域とムスレム教地域の緩衝地帯として放置されていました。

レコンキスタの後、サンティアゴへの巡礼路上の街として復活し、15世紀には大聖堂の建設も始まっています。

現在でも巡礼者にやさしい街として、多くの巡礼者が一休みする、人気のある街の一つになっています。街中には迷わぬように、巡礼路の方向を示す標識が多く見られます。

街中のマヨール（Mayor）広場にある、市役所（Ayuntamiento de Astorga）は両脇の塔の上に十字架が建ち、中央には鐘が釣り下がっており、まるで大聖堂を小型にしたようなバロック様式の堂々たる建物です。



なお、1528年にメキシコから初めてカカオ豆が入り、ヨーロッパで初めてチョコレートが作られた街とされています。街にはチョコレート博物館があり、チョコレート屋さんも多くあります。

また、マンテカーデス（Mantecadas）は長方形の紙型に入れて焼く、マフィンのようなパンで、スペイン全土でみられるお菓子ですが、アストルガが元祖と言われます。

ナポレオンが街に滞在したこともあったようです。

聖堂

◆大聖堂（Catedral Manta Maria）

11世紀にロマネスク様式で建設されていた聖堂が1471年にゴシック様式で改築されています。その後の改築で、内部はルネサンス様式で延長され、正面はバロック様式に改造された結果、多くの建築様式が混在しています。

聖堂の正面はレオンの大聖堂の西翼廊の扉口を模倣したもので、両脇に塔が建ち、丸窓のある中央棟は扶壁で支えられています。





中央扉口の上のティンパヌムにはキリストの十字架降下
が浮き彫りにされています。

聖堂内は三廊式で、身廊の中央に大きな聖歌隊席があ
り、中央主祭壇奥のapsesには婉曲に沿い、色鮮やか
で繊細な浮彫彫刻で造られた、大きな五面三層の聖母伝

の衝立が
置かれて
います。
聖堂内
には聖母礼



拝堂、聖ロレンツォ (San Lorenzo) 礼拝
堂、聖ホセ (San Jose) 礼拝堂、聖ミゲ

ル (San Miguel) 礼拝堂、聖テレサ (Santa Teresa) 礼拝堂など多くの礼拝堂が、ど
の礼拝あります堂も金鍍金された立体彫刻と衝立が見られます。



聖ロレンツォ



聖ミゲル



◆司教館

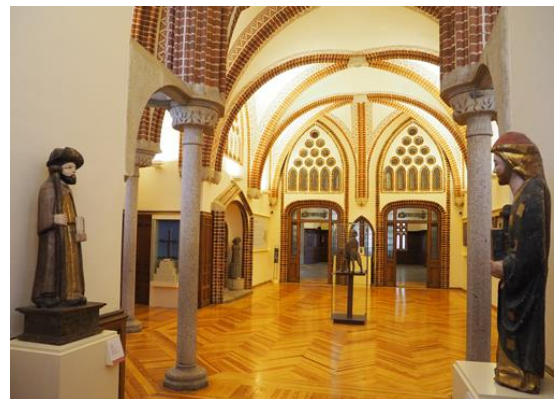
(Palacio Episcopal)

大聖堂の東にあります。19世紀の火災で司教館は罹災してしまいました。建設にあたり、当時の司教（Grau）が、ガウディ（Antoni Gaudi）と旧来の友人で、司教館の設計をガウディに依頼し、1889年から建設が開始しています。

バルセロナで建設に当たっていたガウディは設計書を送っただけで、アストルガを訪れていません。

1893年に司教が死去すると、評議会と折り合いがつかなくなり、工事は中断してしまいます。結局20世紀になって別の建築家により完成しました。

正面の脇には二本の円柱形の尖頭が建ち、遠くからでもその個性ある構造は目立っています。正面の扉口の上には大きな天使像を載せる予定だったとされます。内部はギリシャ十字形で、周囲に礼拝堂、執務室、祭室、聖遺物室などを配置し、四本ある尖頭の一つが螺旋階段になっており、地下から三階まで繋がっています。現在では博物館になっています。



補

フランスからの四本の巡礼路概略



出展：

Kristina Kruger, *Monasteries and Monastic Order*, h.f.ullman publishing GmbH, 2000.

スペイン国内の巡礼路



出展：
Wikipedia